カロッサの詩「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」について

金　子　孝　吉

I　はじめに

ハンス・カロッサに「到達しえぬと思われた山頂」(Unzugänglich schien der Gipfel) という行から始まる詩がある。3連からなる全12行の短い詩である。傑作の立ち並ぶカロッサの全詩作品のなかにあって，従来この詩はほとんど注目を浴びることはなかった。確かに一読しただけではなんの変哲もない地味な詩である。しかし，本稿で検討していく過程で明らかになるのだが，これは実は奥の深い，なかなかに魅力的な作品であり，またカロッサにとって，彼の生涯におけるひとつの大きな分岐点を印した作品なのである。さらに，この詩は，第1次大戦時の従軍体験が基となって生まれた彼の小説の代表作『ルーマニア日記』と密接な繋がりをもち，わずかな詩行のなかに『ルーマニア日記』の根本主題を見事に凝縮して表現している作品でもある。

本稿では，カロッサが第1次大戦中に制作した詩「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」を詳密に解釈することを通して，カロッサの詩的世界の本質的特徴のいくつかを明らかにし，それと並んで，この詩がカロッサの人生において占める位置，またこの詩と彼の他の諸作品との関係を考察することにしたい。

II　詩とその成立経過

解釈の対象となる詩の原文と，その和訳を次に示す。なお，この詩には題名がつけられていない。

Unzugänglich schien der Gipfel;
Nun begehn wir ihn so leicht.
Fern verdämmern erste Wege,
Neue Himmel sind erreicht.

Urgebirg und offne Länder
Schweben weit, in Eins verspielt.
Städte, die wir nachts durchzogen,
Sind ein einfach-lichtes Bild.

Helle Wolke streift herüber;
Uns umweht ihr Schattenlauf.
Große blaue Falter schlagen
Sich wie Bücher vor uns auf.[1)]

到達しえぬと思われた山頂,
いま　そこを私たちはたやすく歩む。
遠くに　最初に歩んだ道が霞んでいる。
新たな天空が達せられたのだ。

始原の山と開けたいくつかの土地が
彼方に漂う，ひとつに溶け合いながら。
夜のうちに私たちが通り抜けてきた町々は
ただ一体の，輝かしい形象となった。

1) Hans Carossa : Gedichte. Die Veröffentlichungen zu Lebzeiten und Gedichte aus dem Nachlaß. Herausgegeben und kommentiert von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. und Leipzig 1995, S.50.　本論文におけるカロッサの詩の引用はすべて上記の本［以下，ＣＧと略記］からおこなった。

明るい雲が　流れ寄ってきた。
その影は　私たちを風のように包みつつ過ぎてゆく。
大きな青い蝶らが　私たちの前で
本のように　羽をひろげる。

この詩が制作され，決定稿が公にされるまでの経緯は，かなり複雑である。[2)] この詩が上に引用した形で最終的に発表されたのは，1920年6月にカロッサが〈叙情的パンフレット〉という形で出版した連作詩集『復活祭』Ostern（マイアー書店，ベルリン＝ヴィンマースドルフ）においてだった。しかし，この詩の大部分が制作されたのは，1916年の晩秋の頃だと推定される。

第1次大戦にみずから志願したカロッサは，1916年8月末，軍医将校としてまず西部戦線に赴き，その後10月以降，東部戦線に移った。彼の所属していた部隊が投入されたのは，当時のオーストリア＝ハンガリー帝国とルーマニア王国の国境付近にあった前線である。この戦線は，トランシルヴァニア・アルプスとも呼ばれる険しいカルパティア山脈上の高地にあり，カロッサは実際この時期，高い山々に何度となく登ったり，山頂やその付近で長期間にわたって野営生活をおこなっている。だから，この詩のなかで描かれている登山情景や山岳風景は，彼の実際の体験に基づいて書かれているということができる。

この詩の大部分が成立したのが1916年の晩秋であることをもっとも明確に示す証拠は，カロッサがこの時期に書いた手紙のなかに見出される。すなわち，彼は，当時彼の情熱的な恋愛相手だったマリーア・デームハルター宛てに送った1916年12月8日付の手紙[3)]のなかに，上に引用した詩とほぼ同内容の詩を書き込んでいるのである。これは，「到達しえぬと思われた山頂」という行から始まる詩の〈初稿〉であると見なされる。この初稿は，決定稿の理解に大いに役立つので，以下，原文とその訳を示しておくことにする。

2) 成立経過の説明については，ＣＧにある Eva Kampmann-Carossa 氏の注釈に多くを負っている。ＣＧ，S.231ff.を参照。
3) Hans Carossa : Briefe Ⅰ 1886—1918. Herausgegeben von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. 1978［以下，ＢⅠと略記］，S.129ff.

Schaurig drohte dieser Felsweg,
und nun gehn wir ihn so leicht.
Was uns naht, verliert sein Grauen
Großer Umblick ist erreicht.

Urgebirg und ebne Länder
sehn wir sanft ins Eins verspielt.
Dunkle Stadt, aus der wir kamen,
wird ein einfach-lichtes Bild.

Über heiße Steine gleitet
kühler Wolken Schattenlauf.
Blaue Schmetterlinge schlagen
sich wie Bücher vor uns auf...[4)]

この岩山の登り道は　恐ろしく思われた,
だがいま　そこを私たちはたやすく歩む。
私たちに近づいてくるものは　その恐ろしさを失った。
広大な眺望が得られた。

始原の山といくつかの平地が
穏やかに　ひとつに溶け合っているのが見える。
私たちがそこを抜け出てきた暗い町は
ただ一体の，輝かしい形象となった。

あつく熱せられた岩石のうえを　滑るように

4) B I, S.130.

涼しげな雲の影が　移動してゆく。
青い蝶らが　私たちの前で
本のように　羽をひろげる。

いま引用した初稿と，決定稿とのあいだの異同については，あとで解釈をおこなう際にも詳しく触れるつもりであるが，ここでごく大まかに言及しておけば，まず両者で大きく違っているのは，第１連では１行目と３行目である。とりわけ３行目は内容がまったく異なっている。第２連では，語句の細かな相違はあるが，それほど大きな異同はない。第３連については，初稿で見られる「あつく熱せられた岩石」という表現が決定稿には見あたらないのが，もっとも目立った違いである。ちなみに，この1916年に書かれた初稿は，1917年に，テーオドール・タッガー編集の隔月刊の雑誌『マルジュアス』Marzyas５月号（ハインリヒ・ホーホシュティム書店，ベルリン）に公表されている。

さて，以上のことから，「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」の詩の原形が成立したのは1916年晩秋であるということがわかったが，しかしこのときに原形のすべてが一度に生み出されたかというと，そうではない。すなわち，この詩の第３連の最後の２行に関していうならば，すでに1914年４月14日のカロッサの日記に，以下のような詩断片が見出されるのである。

Dunkle Schmetterlinge schlagen
sich wie Bücher vor dir auf.[5)]

どのようなコンテクストで，以上の２行の詩行が書かれたかを明らかにするために，当日のカロッサの日記の全文を次に引用しておく。

1914年４月14日

5) Hans Carossa : Tagebücher 1910―1918. Herausgegeben von Eva Kampmann-Carossa. Frankfurt a. M. 1986［以下，ＴＩと略記］, S.176.

暑い一日だった。午後，ラウフェンバハ渓谷に行く。山の上に登り，私の上着を敷いて，その上で眠った。そのとき突然，岩石と大地の存在を感じ，下方にある小川が轟音をたてて流れているのが聞こえた。私は，羽のある虫や羽のない虫がたくさんこちらへ近寄ってくるのが見えた。だが，眠くてたまらなかったので，手を動かして，それらを追い払おうとはしなかった。[6)]

この文のあとに，先ほどの「暗い色をした蝶らが　君の前で／本のように　羽をひろげる」という２行の詩断片が記入されているのである。この詩行で初稿と違っているのは，「蝶」の前に置かれた形容詞が「青い」ではなく「暗い色をした」となっていること，そして「私たちの前で」ではなく「君の前で」となっていることだけである。

また，ここで注目しておかなければならないのは，この「暗い色をした蝶ら」をうたった２行の詩断片が書かれたのが，1916年晩秋に初稿が成立したときと同じく，「山」の上においてだったということである。（上の日記の文に出てくる「ラウフェンバハ渓谷」は，パッサウ市の西に位置し，ドナウ河に注ぎ込むラウフェンバハ川が作った深い峡谷である。この峡谷付近の山々はカロッサが生涯を通じてもっとも好んだ Wanderroute＝ハイキングコースのひとつだった。）

いまひとつ，詩の成立過程について言及しておくならば，カロッサの詩に詳密な注釈をつけているエヴァ・カンプマン＝カロッサ夫人は，初稿ならびに決定稿の第１連について，それと内容的に深い関連をもつ文が，すでに1914年の春頃――「蝶」についての２行断片が生まれたのとほぼ同時期――に書かれた紙片のなかに見出されると指摘している。すなわち，

遠くに聳える山脈のいくつかの道はどんなにか急で険しく見えることか。登ることなど不可能に思える。だが，実際私たちがそれらの道に辿りつくと，道は少しの苦労で登ることができた。つまり，私たちは未来を恐れることは

6) Ebd.
7) C G, S.231f.

ないのだ！[7)]

という文である。これは，詩の第１連を散文の形で敷衍したものであり，第１連の理解を大いに助けるといえよう。

以上，「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」の詩の成立の過程を見てきたが，ここで簡単にまとめておくと，この詩は，まず1914年の春に第１連，そして第３連の後半２行のそれぞれの原型が成立し，1916年秋，カロッサがルーマニア戦線に投入され，カルパティアの山々に何度か登ったころに初稿が出来あがった（初稿は1917年に一度雑誌『マルジュアス』に掲載される）。しかし，その後さらに何箇所か手が加えられて，結局1920年に決定稿が連作詩集『復活祭』のなかの一篇として公表された，というわけである。

さて，このくらいで準備は十分に整ったと思われるので，これから詩の解釈に移ることにしたい。

Ⅲ　詩　の　解　釈

第１連から見ることにしよう。まず，第１連の初稿と決定稿とのあいだの異同について触れておく。冒頭行については，初稿の「この岩山の登り道は　恐ろしく思われた」に比べて，決定稿の「到達しえぬと思われた山頂」という表現のほうが，遥かに引き締まっており，詩に冒頭から雄大なスケール感を与えることに成功しているといえよう。４行目についても，初稿の「広大な眺望が得られた」という，いささか説明的・具体的すぎる表現より，決定稿の「新たな天空が達せられたのだ」のほうが鮮烈で印象度が強く，詩に奥行きの深さをもたらしているように感じられる。総じて第１連については，初稿の少々冗長な言い回しに比べ，決定稿は凝縮性がより高まっているといってよい。

さて，この第１連の意味の理解については，先にも述べたが，詩の成立経過のところで見ておいた1914年春頃に書かれた文が大いに役立つ。遠く離れた場所から，高く聳える山脈を眺めているときには，それはあまりに険しく見え，その頂上を極めることなど到底不可能に思えた（初稿の表現を使えば，それは

Schaurig「恐ろしく」さえ思われた，とされる)。だが，実際に登山道を登り始め，どんどん高度をあげていくと，それは，遠くにいて想像して（恐れて）いたよりも容易であることがわかったというのである。そして，ついに「山頂」に「到達し」たとき，「最初に歩んだ道」は遥か「遠く」の下方に「霞んで」みえるようになる。また，登頂者にはそのとき「新たな天空が達せられ」るともうたわれる。すなわちカロッサは，平地にいたときとはまったく違う「新たな」世界へ入ることができたのである。では，カロッサが「山頂」で体験した「新たな」世界とは，いったいどのようなものだったのだろうか。

それを明らかにする前に指摘しておかねばならないのは，カロッサの抒情詩がつねに深い象徴性を帯びているということである。それについては，すでに一度別の箇所で論じたことがある[8)]ので，ここでは詳述しないが，要するにカロッサの詩においては，たとえばいろいろな自然の形象や現象，人間の行為のことがうたわれている場合でも，実は同時にその背後にさまざまな複雑な意味が重層的に潜んでいるのである。

カロッサ文学のそうした象徴性への強い傾向は，この詩にも随所にうかがうことができる。それを念頭に入れて，この詩をあらためて読んでいってみよう。まず，恐ろしいほどに高く，登り難く思われた「山頂」は，文字通りに読まれるだけでなく，それは，カロッサが人生を歩んでいく上で是非とも乗り越えなければならない困難なハードルの象徴としても読むことができるといえる。また，第１連の原形となった1914年春の散文的文章では，険しい山の道は，文脈からして彼の「未来」を指していることは明らかである。そのときの時代背景を考えると，カロッサが不安に思っていたのは，彼自身の個人的な未来であると同時に，それとも深く関係する，ヨーロッパでまもなく起ころうとしていた大規模な戦争とそれが引き起こす激しい社会的混乱でもあるといってよいだろう。そして実際1914年の夏には，ヨーロッパ中を巻き込んだ戦争が勃発する。カロッサは1915年秋に入隊し，約１年にわたるアウクスブルクでの軍事教練を

8) ハンス・カロッサ全集第７巻（臨川書店 1996年）所収『ルーマニア日記』（拙訳）の「解説」（とくに268頁以下）を参照。

経て，1916年秋には，いよいよ危険な前線に配置される。つまり，恐ろしいほど険しい高山とは，ルーマニア戦線に投入された彼が実際に登らねばならなかった急峻なカルパティア山脈を指すと同時に，彼がそのときに克服しなければならない前線でのさまざまな大きな苦難を意味していると捉えることができる。この詩でうたわれている「到達しえぬと思われた山頂」とは，結局，彼自身の人生において目前に迫ってきていた乗り越えなければならない至難の状況を意味しているのである。

さて，その困難は，カロッサが遠くから予想していたときには，とても克服することは不可能なものに思われ，彼は恐怖や不安にとらわれていた。しかし，第2行では，彼が実際そのなかに飛び込んでみると，意外にも克服はそれほど難しいものではなかったとうたわれる。そうなったのは，ただ単に〈案ずるより産むが易い〉ということではなく，彼が困難な状況に勇気をもって飛び込んだことにより，それまでは彼に見えなかったものが見ることができるようになった，つまり「新たな」世界を見ることが可能となったからだと考えられる。ここで再び，この「新たな」世界とは何かという先ほどの問題に戻るのだが，それを解くうえで重要なヒントとなるカロッサの書簡の一節がある。彼が前線近くにある町ジメシュ・ビュックから1916年12月8日にマリーア・デームハルター宛てに書き送った手紙（詩の初稿が書かれていたのと同じ手紙）である。この頃マリーアはある事件のことで傷心の日々を送っていたが，カロッサは彼女に宛てて次のように書き綴っている。

あなたは私のことを心配してくださるには及びません。同情もまったく必要ありません。私がたとえ，ときに寒さに凍え，また多くの辛い困難に打ち勝ち，多くの危険な時間を慌ただしく切り抜けなければならないとしても，私は，あなたよりは遥かにうまくいっているのですから。私はいま，これ以上ないほどの激動のさなかにいると感じています。にもかかわらず――私が東部戦線に移ってきてから，非常に奇妙なことに――私の心はまったく落ち着きはらっているのです。（中略）私がこの雄大な風景のなかでの恐ろし

い戦いを経験して以来，私は自分自身を再発見したかのようです。私はいま，私の人生を，あたかも山頂から見おろすように見ています。……[9]

カロッサは苛酷な山岳戦のただなかにいるにもかかわらず，彼の心はいままでになく「落ち着」いていて，かえって戦場でこそ，いままで見失っていた自分自身を取り戻すことができ，彼の「人生を，あたかも山頂から見おろすように見」ることができたというのである。カロッサは，至難の状況とみなされる危険な戦場においてこそ，迷いから脱し，これまで歩んできた彼自身の人生の「道」を一挙に見渡すことができるような，生涯において一度あるかなきかの恵まれた瞬間に達したのである。

この時期のルーマニア戦線での体験を基にして書かれた小説『ルーマニア日記』（1924年刊）の最後近くに見られる記述も，第１連の理解を助けてくれるだろう。その場面で主人公の軍医は，仲間たちとともに，敵であるロシア軍による激しい砲撃を受け，もう少しで死ぬような危険な目に遭う。そのあと彼らは，狭い谷間に閉じ込められるのだが，そこから出ようとすると，ただちに砲弾の雨が降ってくる。そうした人生の最大の危機ともいうべき状況のなかにあって，主人公はこう記す。

……私たちの仲間で，意気消沈している者はひとりもいなかった。そうなのだ，生と死がすぐに隣り合っている緊迫したときには，私たち人間の本性を形作る元素は強固にされ，純化されるようなのだ。そして，粗悪な鉛の鐘が，純粋な酸素のなかに浸されるとたちまち銀の鐘にも似た響きを出しはじめるように，その凝縮された時間のなかでは，だれもがその人本来の固有の響きをもって語りはじめるものなのだ。[10]

9) ＢＩ，S.129.
10) Hans Carossa : Sämtliche Werke. I. Bd. Franfurt a. M. 1962［以下，ＳＷＩと略記］，S.498.［邦訳：ハンス・カロッサ全集第７巻（臨川書店 1996）所収『ルーマニア日記』（拙訳），119頁。］

ルーマニア戦線で主人公を取り巻いている死の危険が溢れる空間こそ「純粋な酸素」に満ちた空間なのであり，また，死の淵に瀕した瞬間こそが「凝縮された時間」なのである。そのなかでこそ，初めて主人公は「銀の鐘にも似た響き」あるいは「その人本来の固有の響き」を発することができる。これは，つまり，自分自身の本来の姿を見きわめることによって，その人の存在の本質を表現するような真正の詩をうたうことが可能になるということだろう。

日常的な空間・時間のなかで長いあいだ暮らし続けていると，人間にはいつのまにか日常の余分な贅肉や垢がついていき，自分自身の本当の姿がだんだん見えなくなっていく。ところが，戦地で，死とすぐ隣り合った大きな危険のなかに入るやいなや，その人から不必要な贅肉や余分なものがそぎ取られ，人は自分の本当の姿を正しく見ることができるようになる。危難のなかでこそ，その人は本来の自分自身に生まれ変わることが可能となるのである。――結局第４行は，カロッサが日常を遠く離れた緊迫した時空間において，自己の真実の姿を再び見出したことをうたっているのであり，彼が「達した」「新たな天空」とは，そのようなことを可能にしてくれる場所を指しているのにほかならない。

第２連について。この連はほぼ，カロッサが1916年10月後半以降，カルパティア山脈上にあった前線で戦うために，そこへ何度か登ったときの体験が基になって書かれている。それは，カロッサがこの時期に書き残した日記を読めば明らかである。たとえば1916年10月23日の日記に次のような記述が見られる。

> ･････私たちのはるか遠くの後方に，さきほど通り過ぎた，山あいに広がる町が，いまや太陽の光に照らされて明るく輝いているのが見えた。いまなお雨のなかをずぶぬれになって馬で進んでいる私にとって，それは一瞬ではあるが気持ちを和ませてくれる光景だった。･････[11)]

11) ＴＩ，S.230.［邦訳：ハンス・カロッサ全集第９巻『日記』（拙訳）（臨川書店 1998），64頁。］

あるいは同年11月１日の日記には，

> 夜中の１時，熟睡していたときに，４時15分に進発するとの命令。まだ真っ暗なうちに出発。黒々とした連山の上付近の空が，しだいに帯状に黄色くなっていった。……私たちはなおも８キロ，馬に乗って進んでいったが，それから先は，馬を置いていくことになった。いまや非常に険しい坂道を登っていく。息をぜいぜい切らして，ときおり足を止めて休み，紺碧の山並みを見おろす。私たちの後ろには，いままで行軍して通り過ぎてきた土地が，青々と，まだ一度も見たことのない風景のように広がっていた。ようやくバコー・テテー[12]に到達。野営地。みんなと同じように，私も地面の上に直接横になって，白い雲の浮かぶ，４月のような青空を眺めた……[13]

と綴られている。これらの記述からわかるように，カロッサの部隊は前線への移動のための行軍をおこなうとき，まだ夜の明けないうちに宿泊地の町を出発し，山に登っていったことがたびたびあった。ほとんどなにも見えないほどの深い暗闇に包まれ，出発する町も途中で通過する町も，それらの様子などまったく見当もつかず，ただただ一生懸命そこを縫って行軍する情景が想像される。しかし，山頂に登りつくと，そこからは，いまや太陽の光に照らされた町々を，その全貌を，いとも容易に見渡すことができる。夜の暗黒のなか，ひとつひとつの町の複雑な通り道を右往左往しながら苦労して抜け出てきたのだが，いま山頂に立てば，それらの町の道や建物，町の全体の様子が，一望のもとに眺められる。それらはいまや，昼の太陽の明るい光を浴びて，「ただ一体の，輝かしい形象」として，眺める者の前に広がっているのである。また，頂上に登るためにこれまで越えてきた低い山々も，それらの間に広がる平野（盆地）も，そこを通ってきたときには，関係のない別々のものに感じられたが，いま高い山頂から見おろせば，それらは，どれもみな遥か遠くに離れて，もはやひとつ

12) 山の名前。ハンガリー語で「テテー」は「頂上」・「ピーク」を意味する。標高1205メートル。

13) ＴＩ，S.237f.［邦訳：注11）の訳書の72－73頁。］

にまとまったものとして眺められる。「始原の山と開けたいくつかの土地」が「ひとつに溶け合」うというのは，そうした状態を指すといってよいだろう。

カロッサが実際に眺めたと思われるこのような山頂からの風景は，しかし，先ほども説明したとおり，同時にカロッサ自身の個人的な内面的体験の風景としても読まれるべきだった。夜のあいだに無我夢中で通り過ぎた町々，あるいは，やはり暗闇のなかで辛い思いをして登り越えてきた低い山々は，カロッサのそれまでの人生におけるさまざまな困難に満ちた過去を暗示するものだろう。これまで彼はいろいろと苦労に満ちた人生を歩み続けてきた。幾度となく迷ったり，目標を見失ったり，絶望したり，焦ったりしながら。そのときには，自分がしていることの意味・脈絡など見通すこともできず，ちょうど夜の暗闇のなかで険しい山道を登らねばならぬときのように，まさしく手探りの状態で，這いつくばるようにして前進してきたのである。だが，いま彼は人生のひとつのピークに達した。そしてそこからは，彼がそれまで辿ってきた人生の歩みのすべてを一挙に展望することができた。またそのとき彼は，自分の過去の人生のひとつひとつの苦しい体験の意味や価値をようやく落ち着いて振り返ることも可能となったのである。

第３連について。まずテキストの異同から見ておこう。前半の２行に関していえば，初稿でうたわれている情景は，高山の太陽の強烈な日差しを浴びて熱くなった岩の上を雲の影が通り過ぎることによって岩が冷やされるというもので，読む者にとっては理解しやすいが，それに対し，決定稿は，とりわけ２行目の表現が少々抽象的であることから，イメージを捉えるのが難しくなっているといえなくもない。それはおくにしても，決定稿の２行目でもっとも注目すべきは，初稿には見られなかった〈風が吹く〉(um)weht というモティーフが登場したことだろう。〈風が吹く〉ことによって，高山の頂上にいる雰囲気がさらに強調され，また，後半の２行における「本」が開かれるという展開への繋がりがより明確になったということはできるように思われる。

さて，一般に「雲」は，太陽の光を遮り，青空を覆い，地上に陰を作るネガ

ティヴな存在であるとみなされることが多い。たしかにカロッサの文学において，「雲」は太陽と青空を隠すという点では，否定的に見られる場合がある。しかし同時にカロッサにとって，天高く浮かんでいる「雲」は，人間よりも太陽の近くにいて，より多くの光を浴びているという点では，ポジティヴな存在でもあるのである。August Langen は，カロッサにとって「霧」は――「雲」と「霧」は同じものとみなしてよい――「ほのかに光る純粋性を備えた，天空の精気（エーテル）にも似た，清澄で霊的な要素をもつ存在である」と述べている。[14] つまり，その白いほのかな輝き，とらえがたい絶妙な軽やかさによって，「雲」は「天空のエーテル」に近いものなのである。

雲が風によって山の頂きに吹き寄せられ，峰をかすめ，すばやく流れ去っていくのは，高山ではよく見られる風景のひとつである。この詩では，「雲」に「明るい」という形容詞が被せられている。つまり，ここに登場する「雲」は，高山のひときわ激しく照りつける太陽の〈光〉を浴びて，「明るい」色に輝いているのである。――ところで，カロッサ文学にとって〈光〉は，暗闇のなかで迷妄に陥りがちな人間がたえず目ざさずにはいられない〈真実〉の象徴だった。そして，しばしば指摘されるように，カロッサは生涯を通じてその根源的な〈光〉を讃え，追い求めた詩人だった。[15] そのような〈光〉を発する太陽に，この山頂の「雲」は強く照らされている。結局，この詩における「雲」は，崇

14) August Langen : Hans Carossa. Weltbild und Stil. Berlin 1955, S.41. カロッサにおける「雲」・「霧」の象徴的意味については，Ferdinand van Ingen : Hans Carossas „Rumänisches Tagebuch". In : Hans Carossa. Dreizehn Versuche zu seinem Werk. Hrsg. von Hartmut Laufhütte. Tübingen 1991, S.213ff. にも言及がある。van Ingen によれば，カロッサ文学にとって「霧」(「雲」)は「両義的な意味」をもち，一方では「見通しを妨げるもの」であるが，また「日常的な世界から希望に満ちた奇跡的な世界」への「移行」地点に存在する「中間領域」であるとされている。van Ingen も，カロッサ文学における「雲」をまったくのネガティヴな自然表徴としては捉えていない。

15) カロッサ文学における「光」のテーマに関する研究は数え切れないほどある。なかでも，かなり古くなったが著名なものに，Ernst Bertram : Lichtgeheimnis. Über Hans Carossas Gedichte. In : Das innere Reich 3 (1936/37) , S.1210―1237 がある。その他，前注で掲げた August Langen : Hans Carossa. Weltbild und Stil. Berlin 1955 や，比較的新しいものでは，Arthur Henkel : Beim Wiederlesen von Gedichten Hans Carossas. In : Zeit der Moderne. Zur deutschen Literatur von der Jahrhundertwende bis zur Gegenwart. Hrsg. von Hans-Henrik Krummacher, Fritz Martini und Walter Müller-Seidel. Stuttgart 1984, S.119―142 等 を参照。

高な光をたっぷりと浴び，それ自身も「明るく」輝いていることから，肯定的に捉えられているといってよいのである。それに，初稿で明瞭にうたわれている通り，その「雲」が作る「影」によって，疲れた登頂者は一瞬の爽やかな「涼しさ」を味わうこともできるのである。

詩の最後の2行では「大きな青い蝶」が登場する。この詩はここまでは壮大なスケールの自然をうたってきたが，ここで一転，ミクロな自然に眼を向ける。山頂には「青い蝶」が何匹か，とまって休らっていた。苦労して頂上まで登りつめた「私たち」がそれらを眺めたとき，蝶は「羽」を開いた。それは，ちょうど「風」が吹いて「本」の頁が自然に開かれるように，「私たちの前で」「ひろげ」られたというのである。

「蝶」はその美しさと軽やかな飛び方，また変身をおこなう生態によって，西欧では一般に人間の「魂」の象徴とされる。また，ゲーテの『西東詩集』のなかの有名な詩「至福の憧れ」Selige Sehnsucht[16] に典型的に見られるように，蝶は，たとえ死の危険を冒しても，燃える蝋燭の〈光〉めがけてまっしぐらに飛んでいくということから，〈真実〉を求めてやまない存在の象徴でもある。カロッサの詩作品にも，蝶は何度となく登場し，彼の文学上の大切なモティーフのひとつとなっている。たとえば，カロッサが公表した詩のなかでは最も早い時期（1898年）に成立した詩である「神秘の星」Stella Mystica では，蝶は次のようにうたわれる。

･････ 山の蝶たちは震えて飛び立った，
光に誘われ　暗い靄がかった洞窟のなかから。
蝶たちは香りの庭で　ひらひら飛び回り，
それらの情熱的な舞踊の青い輝きを
濡れて滑らかな岩壁が　映し出した。･････[17]

16) Johann Wolfgang von Goethe : Werke. Hamburger Ausgabe. Bd.2. München 1981, S.18f.
17) C G, S.42.

ここでも，ゲーテ的に，「蝶」は暗闇のなかから〈光〉を目ざして「飛び立っ」ていく存在とされている。

また，1911年から12年にかけて書かれた詩「岸辺の霊と蝶」Geist und Schmetterling am Ufer にも蝶が登場している。この詩は，「霊」である「私」が「美しい蝶」に感嘆し，それを憧れつつ見守っているという内容の作品である。長めの詩なので，「山頂」の詩に関係する部分のみを引用する。

私はこれを知っている，それは蝶なのだ。
私に親近な生きもので　光の恵みを受け，
酔って生き　他の何ものにも害をもたらさない。
おお　蝶はなんと天空の精気を吸っていることだろう！
……
さあ今こそ　私に気高い歓びをもっておまえの姿を見せるのだ。
羽の裏面はただ灰色かと見えながら　不思議な金色の
文字が描かれている――網目をなすさまざまな線の，
たいそう繊細にして厳格な交錯は，あたかも響きによって
いのちを与えられたグラスの上の軽やかな砂のようだ。
しかも　それは私の前で　なんという奇跡をおこなうことか！
金色の文字が輝きを放ち――それが私には読めるのだ！
空気と火と水と石と　そして私自身の本質を
今はじめて私は知る，苦痛に陶然としながら。
……
私は燃える――留まれ！　逃げるな！　待て　金色の夢想家よ！
おまえの魔法の書を　もう少しだけのぞかせてほしいのだ！
蝶は舞いながら去る。哀願も呪いもそれを引き留めることはない。[18)]

この詩で「蝶」は，「光の恵み」を受け，「天空の精気」を呼吸しているとされ

18) C G, S.16f.

ている。つまり蝶は，根源的な〈光〉の世界に属す存在なのである。だが，さらに重要なのは，「山頂」の詩と同様，この詩においても「蝶」が文字の記された「書物」とされていることである。ここでは，「蝶」の「羽」の上に「不思議な金色の文字」が書かれているとうたわれ，「蝶」がはっきりと「魔法の書」Zauberbuch と呼ばれている。そしてそれを読めば，「空気と火と水と石と　そして私自身」，結局世界のあらゆる存在の「本質」が開示されるとされているのである。すなわち，「蝶」の「羽」にある輝くばかりに美しく繊細な模様は，世界の秘密を私たちにあらわに語るものなのである。

「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」の詩に登場する大きな「蝶」は「青い」色をしているという。青という色はさまざまな象徴的意味をもっているが，なによりもまずそれは天空の紺碧を想起させる色であり，なにひとつ隠されていないという意味で〈真実〉の顕現を表す色である。この詩の「蝶」の「青い」色は，高山の頂きの上に広がる無限に澄んだ蒼空を映し出しているといってよいかもしれない。

ここまで来れば，最終２行の意味はかなり明らかになる。天空に聳え立つ高山の頂きで休らっていた「蝶」。その閉じられていた「羽」が，いまや，高山の頂きまで登ってきた人間の眼前で「ひろげ」られた。羽の色といい模様といい，それはこの世のものとは思えぬほど美しいものだった。それは，あたかも「魔法の書」の頁が「ひろげ」られたかのようで，それを読むことによって人間は世界の最奥の秘密を悟ることができるのである。――だが，ここでまた問題がひとつ生じる。すなわち，「蝶」の「羽」が私たちに伝えてくれる自然界の奥義とはいったい何であるのかということである。この問いに対する答えはひとつではないだろう。けれども，カロッサの詩的世界の本質に照らして推察してみるならば，彼の脳裏にはおそらく次のような考えがあったのではないかと思われる。

「蝶」Falter，Schmetterling は，その姿形や飛び方の美しさ，軽やかさによってだけでもすでに感嘆すべき生き物である。しかし，その最大の不思議さは，蝶が〈光〉を見出すやいなや，それがたとえ燃える火であっても，それに

向かって，命の危険も顧みずに飛び込んでいくということだろう（ドイツ語圏では一般に，「蝶」と，夜に光のまわりに集まる「蛾」を区別しないことに注意！）。ゲーテの詩「至福の憧れ」に深い影響を受けていた[19]カロッサにとって，やはり「蝶」とはまずなによりも，光を発する火を見つけると，みずからの死をも恐れることなく，その光を目ざして勇敢に飛び込んでいく存在だった。「蝶」は〈光〉＝〈真実〉に到達しようと，生と死の危険な境界に勇気をもって飛び込んでいく。そうした厳しい覚悟がなければ，世界を統べる真実に最終的に到達することはできない。おそらくそのことが，「蝶」が私たちに教えてくれる世界についての秘められた奥義のひとつであるといってよいように思われる。

Ⅳ　ま　と　め

「到達しえぬと思われた山頂 ･･･」から始まる詩は，カロッサがおもにルーマニアの山岳地帯で現実に体験したこと，実際に見た風景をうたったものであるが，それと同時に，彼が人生のひとつの大きな転換期に達したことを告白した詩でもあった。カロッサは，登る前には到底不可能だと思えた「高山」への登頂に成功し，そこから，彼自身のそれまでの人生を一望のもとに俯瞰することができた。いまや，彼のそれまで辿ってきた人生の道，そのすべての体験の連関が，彼にはっきりと捉えることができるようになった。山頂において，遠く離れた景色の全体を一挙に見渡すことができるように，この時期カロッサは，彼のそれまでの過去のすべての体験を遥かな高みから余裕をもって眺めることができる，人生におけるひとつの頂点に達したのである。

実際，ルーマニア戦線での死の危険と隣り合わせた経験のなかで，カロッサはようやく自分の過去を落ち着いて振り返ることが可能となった。すなわち，カロッサは自身の幼年期の思い出を綴った自伝的作品『幼年時代』の制作にしばらく前から取りくんでいたのだが，その主要部分は，平穏な環境でよりも，

19) カロッサがゲーテの詩「至福の憧れ」に強い関心を抱き，高い評価を与えていたことは，カロッサの作品『狂った世界』や『現代におけるゲーテの影響』を参照。(Hans Carossa: Sämtliche Werke. Bd.2. Frankfurt a. M. 1962, S.705f., S.956.)

この危険と困難に満ちた戦場において，むしろ精力的に書き進められたのだった。危険な前線のただなかでこそ，カロッサに彼の幼年時代の記憶が次から次へと甦ってきたのであり，そこでこそ初めてカロッサは，彼の幼年時の体験のさまざまな様相をありのままに見，それらの意味を正しく捉えることができたのである。

また，険しい高山を登りきったカロッサは「新たな天空」に達し，そこで休らっていた「蝶」の「ひろげ」られた「羽」を見ることによって，大切な秘密を開示された。つまり，人は，大きな危難の状況のなかにあってこそ，かえって本来の自分自身に戻ることができ，真実を見ることができること，絶望的な暗闇をくぐり抜ける体験を経ずしては，光の真の価値を知ることはできないということである。だが，それは，カロッサが，たえず「生と死がすぐに隣り合っ」た状況にあった厳しいルーマニア戦線においてつかんだ確信でもあった。小説『ルーマニア日記』のテーマは，その扉に付された有名なモットー「蛇の口のなかから光を奪え」[20]のなかに端的に現れているということができる。すなわち，それは，人は危険のなかに勇敢に入り込んでいかなければ真実を獲得することはできないということだった。結局，カロッサが『ルーマニア日記』で語ろうとしたことと，この「到達しえぬと思われた山頂･･･」の詩で表現しようとしたことは，同じなのである。「蛇」も急峻な「山」も，第一義的には，戦争とそこでの恐るべき危険や困難のことを指すのであり，その克服しがたく思える相手，みずからの前に立ちはだかる至難の状況に対して勇気をもって立ち向かっていったときに，人間は初めて〈光〉あるいは〈真実〉の世界に近づくことができる，というのが両作品に共通する根本テーマだからである。

「到達しえぬと思われた山頂･･･」はわずか12行からなる短い詩であるが，それを熟読する読者の眼前にこのうえなく雄大な山岳パノラマ風景を繰り広げさせる作品である。また，そこには『ルーマニア日記』の深遠なテーマが見事に濃縮された形で表現されている。この詩は，その言葉が喚起する宏大なイメージとその言葉の奥に潜む意味内容の充溢によって，他のカロッサの詩と比べて

20) ＳＷＩ，S.392.［邦訳：注10）の訳書の２頁。］

も遜色のない作品ということができ，カロッサの人生におけるひとつの頂点を刻印した記念碑的な詩として，もっと注目されてしかるべき作品なのである。